

連携する山とまちの防災計画

京都大学大学院地球環境学堂教授

小林 正美 氏

防災自治を考えるシンポジウムでは、パネルディスカッションの前に小林正美教授による基調講演がありました。講演では、小林教授から「コミュニティ防災」「木製都市への転換」など、数多くのご提言をいただきました。講演の主な内容を抜粋してご紹介します。

防災自治とは

防災という言葉はよく出てきますが、自治というのは、自分で自分らの社会のありようを決めていくことです。防災自治は災害から自由になること、そして、自ら行う危機管理であると思います。

国連で人間の安全保障委員会（緒方貞子、アマルティア・セン共同議長）がまとめた「人間の安全保障委員会最終報告書」というのがあります。

人間の安全保障とは、人間の自由を守る。「死活的かつ広範な脅威」から人を守ることを報告書には、「人間の安全保障は、生存、生活及び尊厳を確保するための基本的な条件を人々が得られるようなシステムを構築する」とあり、そ

の核心は人権の尊重です。それがきちんとつながっていること自体が、私は防災を自治として考えていくことだと思っています。

このような取り組みを支えるのは、コミュニティを基盤として人々の間の共存と信頼の醸成をつくっていくことです。そして、どういう人を対象にするかといったときに女性や子ども、高齢者もしくはその他の弱い立場にある人々の保護を優先事項として人の助け合いのネットワークをつくっていくことが、安全保障の進むべき道です。

ハザードマップの作成

西条市のコミュニティ防災で、まずやらないといけない



ことは、ハザードマップ（災害予測図）の作成です。

これは、（災害で）どんなことが起こったのか、そのとき私たちは何をしたのか。そのときの自分の行動、シナリオの作成、次はこんなふうにしたい、できなかったならこれはどうしたらいいかなど、ハザードマップを持つていないと、災害に遭ってから考えていたら行動できません。毎日そのシナリオを何となく体で覚えているとスムーズになります。

お互いの安全を確認するネットワークの構築は基本です。だがが困っているか分からないというのではいけません。地域で災害弱者となる人の安全確保を基本にして、全体の災害予防と軽減の計画を作成

することが重要です。

コミュニティの中の自分

自分主義過ぎて自分勝手になると、ものすごくごう慢なことになって暴走します。ですから、小さなコミュニティ、すなわち一定の地域に居住し、共属感情を持つ人々の集団、地域社会、共同体の中で、これを自分という範囲にしてしまおうと、一人の自分になってしまい（社会や組織が）ばらばらになります。

私は、このあまりにも自分過ぎるものを防ぐ一つの役割が、コミュニティという組織の中で、ある程度制約を自分に課することが一番いいことだと思っています。

コミュニティ防災は災害リスクマネジメント

リスク（危険）という言葉は、非常に量的な判断が入ってきます。程度とか発生する確率、期待、損失、これは全部経済的な問題に移しかえるための問題の把握のさせ方なのです。

安全とリスクというのは、心理的な問題をいつている場合は安全・安心です。しかし

リスクといったときには、その量とそれが発生する確率の総和です。何人死んだとか、被害がどのくらいあった、そういうことをはつきり定量化することです。

つまり、リスクとして出されたものは、お金の補償を要求されることが今では一般的になっています。

コミュニティ防災は、地域社会の災害リスクマネジメントです。この言葉を私が使っているのは、リスクというのがある程度量的に把握されることが前提になって、それ自体をマネジメント（経営）するというのは、最も経済的に成立するような形でこれをやらない限り、維持できないということなんです。

リスクという言葉を使う瞬間から、これはあなたのマネジメントですよ、自分の財産のことですよ、自分の家族のことですよ、という意識を持たないと、防災の本質が非常に人頼みというか、他力本願的なものになります。

お願いすればいい。後はあきらめる。これは、一番よくない。リスクマネジメントの中には、「あきらめる」ということは出てきません。